

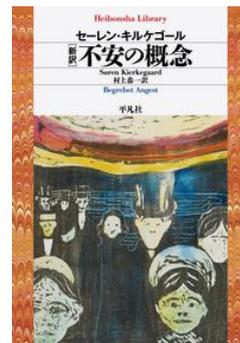
「不安は自由のめまいである」

教育推進センター 中山 文



『ここは今から倫理です。1』

© 雨瀬シオリ／集英社



『新訳 不安の概念』

セーレン・キルケゴール著、村上恭一訳 平凡社

原作である、雨瀬シオリの『ここは今から倫理です。』を読むきっかけになったのは NHK ドラマであった。高校の倫理教師が自らも悩みながら、生徒たちが日常の中で抱える問題に向き合うストーリーがドラマでは 8 話からなっているが、このうちここで紹介したいのは、「自由とは何か」について考えた回である。

ある日の倫理の授業中、倫理教師の高柳は、生徒に円陣を作り対話を行わせる。テーマは「自由であることは幸せなことか」。対話のルールとして「一度に話せるのは一人だけ」「話したがる人に無理やり話をさせてはいけない」「反論は良いが、個人を攻撃し、わざと傷つけてはいけない」としている。この回の主人公である高校生は授業中、頻繁に睡魔に襲われ、この日の授業でも寝てしまう。目が覚めるとすでに授業は終わっていて、隣に座る高柳が静かに語りかける。「貴方はまだ一度も私の授業で起きていた事はありませんね…」「正直、不快です。しかし怒ってはいません。倫理のテストは暗記さえすれば解けますから…」「ただやはり私も人間ですので思いきり寝られるのは不快です」。そして、こう尋ねる。「何か授業で起きていられない理由があるのなら」。

この回のテーマは「自由」である。毎回、哲学者の言葉が引用され、生徒の問題に対するヒントとなっているが、この回はキルケゴールの「不安は自由のめまい」という言葉があげられている。この言葉の出典をたどり、キルケゴールの作品の中に該当箇所を探してみた。

1844年、デンマークの哲学者キルケゴール (Søren Kierkegaard, 1813-55) は『不安の概念』を書き、この中に「不安は自由のめまい」と記している。

不安は、たとえば言えば「目まい」(Svimmelhed) のようなものである。仮にある人がふと自分の眼で大口をひらいた深淵をのぞき込んだとすると、その人は目まいを覚えるであろう。ところで、その原因はいったいどこにあるのだろうか。それは深淵にあるとも言えるし、また当人の眼のうちにあるとも言える。というのも、彼が深淵を凝視することさえしなかったら、目まいを起こすことはなかったろうからである。これと同じようなわけで、不安は自由の目まいなのである。村上恭一 訳『新訳 不安の概念』111 ページ

まず、ドラマのこの回にひかれたのは、生徒の行動に対する高柳の「やはり私も人間ですので思いきり寝られるのは不快です」との率直な言葉であった。不快を不快とそのまま伝えられるかどうか、自身に置き換えて考えてもみた。学生時代、「自由は不自由である」と言われたことがあったが、人生においてさまざまな選択をする際、選択できる自由はあるが、何れを選ぶべきか、との悩みや不安を経験することで「不自由」の意味を知った。ここ数年間の社会全体に及ぶ不安 (Angest) をはじめ、個人で抱える不安からは決して逃げ出すことができないかぎり、これらの不安を抱えたまま生きていく方法を摸索することになるであろう。閉鎖的な時代であればこそ、200 年も前に「不安」について追究した一哲学者の言葉の意味について考えてみる必要があると思った。